

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第15回「肉用牛になった但馬牛 ～神戸ビーフへの途～」（その2）

大正から昭和初頭にかけて、肥育は有馬郡（現在の神戸市北区、三田市周辺）や多紀郡から東播磨、北播磨、氷上郡に広がりましたが、戦争により大きな打撃を受けました。

支那事変が勃発した1937年以降、飼料事情は悪化し、肉牛の軍需供出があり、1940年からは肉牛の価格統制も行われて肥育は衰退しました。

そして終戦。社会は混乱し、物資不足により飼料の確保もままならず、インフレで子牛価格が上がり、肥育は殆どできない状況でした。

それでも社会が落ち着いてくると、牛肉需要が生まれ、1949年頃には有馬郡、多紀郡、美嚢郡（現在の三木市を含む）、加東郡等で肥育が復活し始めました。

1950年、国は飼料統制をやめ、家畜改良増殖法を公布し、畜産振興10か年計画を打ち出すなど畜産振興を図りました。更にこの年、朝鮮戦争が起こり、在日米軍の牛肉需要が増え、我が国の去勢牛肥育が発展するきっかけになったと言われています。

この頃の兵庫県は「役肉用牛」の時代で、肥育牛の主体は有馬郡など繁殖しない地域で農耕に使った雌牛でしたが、多紀郡では去勢の肥育も行われていました。

前号でも触れましたが、多紀郡では戦前から湿田の耕耘等に雄牛を使っていました。扱い易くするため市場から購入した雄子牛を10～12か月齢で去勢し、5～6歳まで使役に使った後、短期間肥育して、体重530kgほどに仕上げる壮齢肥育が行われていました。

兵庫県で市場出荷前の子牛を去勢するのは、1953年に津名畜連が試験的に3か月齢の子牛に行ったのが最初です。そして、1954年に淡路の子牛市場で初めて去勢子牛が出荷され、翌年からは本土側の子牛市場でも出荷されるようになりました。

ところが当時、市場から購入した子牛を肥育する技術が無かったのです。

使役に使った後の雌牛を100日ほど肥育して、体重140貫（525kg）にするという一応の目安はありましたが、肥育方法は農家の経験頼りで、去勢壮齢肥育も雌牛の飼い方を準用したものでした。

ちなみに子牛からの肥育は、京都大学の上坂教授が開発した若齢肥育技術を基に1952年頃から各地の試験場が研究し、1955年頃に18～20か月齢で体重450kg前後に仕上げる若齢肥育技術が体系化されましたが、この時点では、まだ農家に普及していませんでした。

去勢子牛が市場に出始めた1954～1955年に子牛価格が暴落します。

当時は第1期高度経済成長が始まった頃で、日本人の食肉需要は増加傾向でしたが、子牛出荷頭数の伸びが大きかったのか、朝鮮戦争の休戦で米軍の需要が減ったことによるのか、その原因は定かではありません。しかし雄、去勢子牛の値段は、その年の政府買入れ米価で米3俵（180kg）程にしかならず、かなり安かったのです。

その雄、去勢子牛の最大の顧客はハム会社でした。ハム会社は豚より安い雄、去勢子牛を買い、そのままと畜場に連れて行ってハムの材料にしました。

こうした状況は繁殖農家の生産意欲を減退させ、肥育農家にも悪影響が及ぶと懸念した兵庫県は、1955年、県畜連に助成し、伊藤栄養食品工業株式会社（伊藤ハム）と提携した肥育牛の預託事業を行いました。

この事業は、伊藤ハムが6か月齢前後で、体重130kg程度の雄、去勢子牛を購入し、1年間農家に預託します。そして1年後、伊藤ハムが引き取る時の増体重に応じて、県畜連が1貫目（3.75kg）当たり350円を預託農家に支払うというもので、600頭が対象になりました。

翌年子牛価格は上昇に転じ、この事業は1年で終わりましたが、但馬牛を「役肉用牛」から「肉用牛」に変える先駆的な役割を果たしました。

その第一は、この事業が農協預託事業として引き継がれ、西神戸、西播磨、更には繁殖地域の淡路や但馬にまで肥育を広げたことです。

次に若齢肥育に対する関心を高めたことです。

農協預託事業を通じて若齢肥育が普及しましたが、単にそれだけではありませんでした。

そもそも若齢肥育技術は大衆肉を作ることを目的に開発された技術ですが、戦前から培われてきた肥育技術を基に肥育期間を延ばし、肉質という但馬牛の特徴を活かす技術に変貌させ、普及していきました。

こうしてこの事業は、神戸ビーフの基本条件である県内一貫生産の基盤を造る第一歩となりました。

(つづく)